

# 早川酒造

自分が携わってきた事業をいかにして後世に引き継ぐか  
その葛藤の中、代替わりや事業継承で新たな風を  
取り入れ挑む事業者の姿を追いました

## 創

業1915年、小島区にある酒蔵「早川酒造」。令和5年9月に代表社員を四代目の早川俊人さんに交代し、代表銘柄「田光」の生産にさらに力を入れています。大学卒業後、家業を継ぐことも視野に入れ、父とともに働きはじめた早川さんは「父の背中を見ながら育ち、生活の一部に酒づくりがあった。家業を継ぐことは自然な流れだった」と振り返ります。転機となったのは25歳の頃、修行と思いついた山形の酒蔵での経験でした。「修行で得た知見を孤野町の水や米ならではの仕込み方に落とし込んで酒をつくってみたい」そう強く感じた早川さんは早川酒造で平成21年、日本酒「田光」を完成させました。



**DATA**  
合名会社早川酒造  
住所 小島 468 番地  
TEL 396-2088  
FAX 396-2338



合名会社早川酒造  
代表社員兼杜氏  
はやかわとしひと  
早川俊人さん

### COMMENT

米農家、孤野町の自然、家族、さまざまな方やものに支えられて生産が続けられてると実感しています。地元へ愛され地域に貢献できなければ我々、蔵元は酒づくりに向き合えないと思っているので、生産者、消費者、地域など全てが「おいしい」という気持ちで繋がり、良い循環が起こるような酒づくりを心掛けていきたいと思っています。孤野町が誇る地酒となれるよう、これからもただただよりよいお酒をつくるという想いで向き合っていきます。

## 素材を生かし孤野町でしか 味わえない味を提供したい



父であり三代目の俊介さん(写真右)とともに写る早川酒造の従業員の皆さん

## 田

光の完成後も品質を高めるために空調設備やタンクの新調などを年々重ね、麹にムラが出ないよう麹箱を特注したり、室内の温度管理をアプリで行ったりと味の個性をより深化させようと試行錯誤を繰り返してきました。経営

### さらなるおいしさを求めて

的に苦しい時期もあったそうですが、商品コンセプトをしっかりと構築し、味を追求してきた結果、「田光」は早川酒造の主力銘柄となり、年間3000本程度だった出荷本数が現在では4万本まで拡大したそうです。「父の妥協しない姿から学び、早川酒造の歴史に恥じない味を追求してきた。価格以上の孤野町でしか味わえない味をさらに提供していきたい」と今後の展望を語ります。「地下50mから汲み上げた鈴鹿山麓の超軟水の伏流水を使用し、地元田光で生産された酒造好適米「神の穂」を使用している。この孤野町の魅力ある資源を生かした酒づくりを続け、地元の誰もが誇れる酒となれるよう取り組んでいきたい」と想いを語っています。



## 萬古焼窯元の新たなスタート

### 一代で築き上げた技術と実績

## 平

成4年に永井区で創業した萬古焼の工房「クラフト石川」。代表であり窯元である石川哲生さんは26歳のとき、転職を機に未経験の窯業の世界に飛び込みました。技術的なノウハウは全くない状態でしたが40歳で現在の工房を立ち上げ「最初は機材も何もない借金だらけの状態からスタートした」と振り返る石川さん。それ以来、31年間の永きにわたり夫婦二人三脚で「クラフト石川」製の萬古焼を世の中に送り出してきました。積極的に全国各地のイベントに出店し、工房の隣には作り上げた製品を購入できるショップも併設し、遠方からも購入者が訪れるなど、ファンの多い人気ブランドとなりました。



**DATA**  
クラフト石川  
住所 永井 3029 番地  
TEL/FAX 396-3731



クラフト石川  
いしかわてつお  
石川哲生さん

### COMMENT

ここまで作り上げてきたブランドを誰かに引き継ぎたいという気持ちはありましたが、信用のある方でないと引き継げないと思っていました。そこで今回の事業継承の話があり、販売先も今後は全然違うかもしれませんが、自分のブランドが残る生産が続けられていくことを大変有難く感じています。萬古焼という地場産業の灯を消さないよう、今後も引き継ぎ役となる、そんな仲間がさまざまな事業で増えていったら嬉しく感じます。



▲山口陶器の伊藤さんと談笑しながら作業を行う石川さん。萬古焼の経験がある人への引き継ぎは比較的スムーズに行えたという

### こだわりの含めて事業継承

石川さん自身から技術や工房の引き継ぎ作業を行うため、山口陶器の従業員がクラフト石川を訪れるようになりました。「同じ萬古



## 地場産業の灯を 消さないために

焼でもクラフト石川では成形から釉薬作り、焼き上げまでの工程を全て一人でやる。分業制で取り組む現在の窯業とは大きく違うこともあり、うまく引き継げるか不安もあった」と石川さんは語りますが、引き継ぎから1年が経過した現在は「ちょっとしたこだわりまで見逃さず引き継いでくれていて」と満足そうに語ります。そして、令和6年1月1日から「クラフト石川」は新たなスタートを切り、山口陶器の販路を活用して「クラフト石川」の製品が孤野から世界へ出荷されています。